

かごしま農36景



水をゆっくり歩かせ

戦後間もない昭和二十四年、梅雨期にデラ台風などが襲来。豪雨に見舞われ、シラス台地の侵食、崩壊が相次いだ。中でも末吉町高松と串良町中山のそれは凄まじく、一夜にして地形が変わったといわれた。雨水は低い所に集まり、水みちを造り台地を侵食した。また、地下に潜りシラス層を押し出し崩壊を大きくした。そこで排水路を台地上から河川まで系統的に設置して雨水を一気に河川に導く農地保全事業が生まれた。

武田信玄は甲府盆地の釜無川、笛吹川に霞堤を築造。現在でも、その一部が残る。私たちは堤防というと、河川に沿う連続した堤を思い浮かべるが、霞堤は雁行する不連続堤。その下流端が開放されているため、洪水はゆっくり堤内を逆流して溢水する。また、信玄は堤内に流入する水勢を弱め、被害を軽減するため堤の内外に植林した。この水防林は肥沃な浮遊泥を堤内に止め、堤内は農地としても使われた。木村春彦氏は『現代の災害』の中で日本古来の農民の経験と知恵が「水をゆっくりと歩かせ」「浸水のある程度許容し」「復元力のある地域をつくる」治水思想を産み出したと述べている。

「信玄堤」が築かれたのは一五四二年。それから二百年後の江戸中期に都市や耕地が拡大すると、洪水の被害が増大したという。そこで用いられた治水工法は、河道を強固な築堤や護岸により直線状に固定。川の水は、河川敷の中に押し込められた。それまでの自然を受け入れた洪水処理から積極的に自然を制御する技術へと進んだ。こうした技術の発達、高度な生産力をもたらす、稠密な都市の誕生を可能にしたといえる。

反面、自然を制御する技術にも限界がある。計画以上の洪水が出たとき、あるいは予期せぬ事故があったときなど、人や家が集中しているだけに始末が悪い。九三年災害では異常降雨が被害を拡大したとされ、排水路などの能力を超えた所も多かった。だが、どこでも被害が拡大したわけではない。農地保全の場合、被害の小さい所では跳水を押えるため柵を大きめに作る配慮のほか、集水する一帯に芝を植えて「水をゆっくり歩かせ」などの工夫がみられる。また、雑木の伐採やハウスピニールの処理など、維持管理がキチンと行われている。技術の発達や施設の整備は、私たちから維持管理まで解放しているのではない。「蟻の穴から堤も崩れる」ことを忘れてはならない。

(1994年11月)

◇「かごしま農36景」発行：鹿児島県農業農村整備情報センターより

文：門松経久

写真：森永修三「田植」第4回かごしまフォト農美展